

# 教育 国語

— 64·65 —

1981年 春、夏季号

教育科学研究会・国語部会編

☆むぎ書房の新刊のご案内をおとどけいたします。

# 言語の研究

## 言語学研究会編

### 論文と執筆者

現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語につかわれた完成相

の叙述法断定のばあい

鈴木 重幸

アスペクチュアルな意味を実現する条件についての考察

——シテイルのばあい

渡辺 義夫

連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説

たかはし たろう

「副詞と動詞とのくみあわせ」試論

新川 忠

に格の名詞と形容詞とのくみあわせ——連語の記述とその周辺

まつもと ひろたけ

規定語と他の文の成分との移行関係——文の成分としての規定語

の研究のために

鈴木 康之

慣用句の文法的な特徴——テンスの制限

高木 一彦

あわせ名詞の構造—— $n+n$ のタイプの和語名詞のばあい

ゆもと しょうなん

史的語彙論のための序説

上村 幸雄

「共産党宣言」の訳語

宮島 達夫

英語における主語・述語について

渡辺 慎悟

現代朝鮮語における格助詞 -ege について

ハン ナムス

奥田靖雄(布村政雄) 著作目録

石井 淳一

なお、この論文集は、奥田靖雄先生の  
遺稿をいわって編まれたものである。

A5判・604p・価 80000円

日本語研究の方法 松本泰丈 編

2500円

日本語動詞のアスペクト 金田一春彦 編

3500円

文法と文法指導 鈴木重幸 著

1800円

日本語文法・形態論 鈴木重幸 著

1800円

国語科の基礎 奥田靖雄 著

1200円

東京都文京区関口 3-2-1

むぎ書房刊

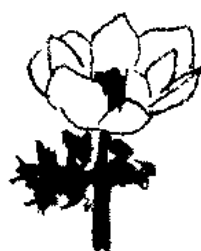
TEL 03-947-4530

☆ご希望の方には、図書目録(もくじ一覧)をお送りします。

中学校における英語教育の意義について・渡辺慎晤 2

言語の体系性(中)・奥田靖雄 13

民族学が国語学と接するところⅡ・「兄弟姉妹」の名称のこと・布村一夫 20



人間復権・闘い・豊穡をめざす文学(上)・労働者文学の現在と可能性・黒古一夫 30

作品鑑賞による日本文学史・明治大正篇・9

自我への哀傷と実生活者・森鷗外の『舞姫』・小田切秀雄 45

詩の歴史 8・明治から現代まで・菅原克己 63

こどものことばの発達(4)・イエ・イ・チヘエワ 78

よみ方指導の方法⑧・エス・ペー・レドズボフ 88

80年冬の合宿研報告・教科研・新潟国語部会 100

1 文の理解と一次読み(上)・中西淑 102

2 描写と表現について・篠崎五六 115

3 主題授業・ひとつの試み・板垣昭一 139

△読み方教材定期便・54V

大石真作『貝がら』(小学校三、四年生用) 145

『貝がら』の作品研究・教科研岡山国語部会・火曜日の会二班 149



# 教育 国語

教育科学研究会・国語部会編  
季刊 1981・3 むぎ書房刊

## 64

# 中学校における英語教育の意義について



渡辺 慎 晤

(1) 一九八一年度から、中学校の英語の標準配当時間が、過あたり、四時間から三時間になる。十年ほど前には、五時間から四時間にへって、こんどが二度目である。英語の時間数がすくなくなるのと平行して、英語の検定教科書のなかには、しだいに、日本人、そして、日本人の生活にかかわるものがさかんに登場してくる。アメリカで生活している日本人の家族、日本人の日常生活を題材にした課もめだつ。なかには、「サザエさん」もある。芥川の「蜘蛛の糸」のはなしを英語でよむ課もある。一方では、当然、アメリカやイギリスのひとびとや、その生活にかかわるものがすくなくなっている。

国際的な舞台での、一方では、日本の、とくに経済面での、躍進と自信、また、他方では、アメリカ、イギリスの指導力のよわまりを、わが国の英語教育が反映しているのだろうか。いままでの英語教育が、そのような日本の実力にもかかわらず、外人によわく、英語、と

くに、はなしことばとしての英語に自信がなく、自分のかんがえや主張を西洋人に対等の立場でかたれず、いつもにこにこしている日本の国際人しかつくれなかったことに對する反省のあらわれなのだろうか。

とにかく、自分の国のものごとを英語をとおして勉強することがめだつ。われわれ日本人にとって、英語のもつ意味がかわったのだろうか。われわれ日本民族が、明治以来の努力によって、文明・文化の面で十分な発展をとげ、もはや、西洋のレベルに肩をならべたので、そして、また、最先端の、高度にすすんだ科学・技術も、芸術も、日本語で教授し学習し、伝達し継承することができるようになったので、英語を媒介にしてまなびとるものがなくなってしまうのか。そして、国際舞台に胸をはってすすみでるために、国際語としての英語——民族語としてではなく——が必要になってきたのだろうか。ある

いは、日本語と英語とでは、表面的な形式がちがうだけなので、意味内容はかわらないという言語のとらえ方からくる教授法の問題なのだろう。

いずれにしても、中学校における英語教育の内容と方法は、一面では、おおきくかわってきている。中学校の英語教育は、いったい、なにをめざしているのだろうか。いまは、なによりも、中学校における英語教育の意義について、その基本的な問題を検討しなくてはならない。

以後、英語を、一般的な外国語の代表として、また、英語教育を、外国語教育の代表として位置づけることにする。

(2) 教科としての英語教育は、義務教育としての中学校の教育課程のなかに位置づいている。この事実は重要である。なぜなら、義務教育は、社会が、自己の維持と発展のために、その構成メンバーとしての個人に、その基本的な資質として、一定の知識、能力、技能を身につけることを義務として課し、その習得の機会を保障するものだからである。一方、個人の側からは、その資質を身につけることによって、その社会のメンバーとして位置づき、そこで、自己の生涯の理想を追求する足がかりを得るからである。義務教育という社会的なものとを、このように、社会からの要求と、その構成メンバーとしての個人の側からの要求との統一としてとらえるなら、義務教育の教科のひとつである英語も、そこに位置づかななくてはならない。民族の歴史的な所産としての文化をうけとめ、さらに、それを発展させていく資質を身につけることを、義務教育全体がその任務としてになわなくてはならないし、英語教育は、そこで一定のやくわりをはたさなくてはならないのである。

はならないのである。

しかし、民族の歴史的な所産としての、われわれの文化は、現代の高度にすすんだ科学も、技術も、芸術も、たしかに、母語である日本語で伝達し継承することができる。

では、英語教育は、なぜ、必要なのか。高度な文化をもつ日本の現代社会と、国際社会のなかでの日本の位置をかんがえれば、外国の文化や産業とむすびづかなくては、日本の将来も、発展もないことはあきらかだろう。また、日本だけの発展ではなく、他の民族との相互理解・連帯、そして、人類全体の発展をめざさなくてはならないだろう。そこでは、人類として、共通に直面する課題を解決していくために必要な情報・思想を交換する手段として、英語、あるいは、なんらかの外国語の能力・技能が必要になってくる。英語教育は、基本的に、現在のできあがった文化をささえるためであるよりは、むしろ、未来の文化の発展をささえ、全人類の繁栄を実現するために必要な資質とかかわるのだということができるだろう。英語教育は、一般的には、外国と文化を交流するために、相互理解のために、思想交換の手段として、英語をつかう能力・技能を形成することをめざすのである。これが、英語教育のもつ、もっとも基本的な目的であり、意義である。この英語教育の、実用的な、実践的な目的・意義は、教科としての英語に固有であり、他の教科ではまかなえないものである。

(3) 英語の実践的な能力・技能を身につけることによって、子どもたちは、よりすすんだ教育をうけ、自分の将来の仕事をよりたかいレベルですすめる可能性を得ることができよう。

日本民族の文化を発展させ、世界全体の繁栄を実現するためには、

われわれは、文化のそれぞれの領域で、世界のたかいレベルの成果から、まだまだ、たくさんのごとをまなびとらなくてはならない。

そのとき、英語で情報や思想を交換する能力・技能は、その国際的なレベルで仕事をすすめるための、われわれの文化を国際的なレベルにたかめるための条件である。

したがって、大学や高等学校では、自分たちの将来の仕事とかかわって、専門の知識や技能をたかめるとともに、それにかかわる情報や思想を、英語をつかって交換する能力・技能をみがきあげなくてはならない。ここで形成する英語の実践的な能力・技能は、将来の仕事のレベルを決定し、ひいては、日本の文化の発展のあり方を決定するだろう。

高等学校や大学で、それぞれの専門、あるいは、将来の仕事とかかわって、英語で思想交換をすすめることを学習しなくてはならないとすれば、それ以前に、英語の実践的な能力・技能の基礎を身につけていなくてはならない。中学校の英語教育は、高等学校や大学の教育内容からの要求でもある。いいかえれば、中学校の英語教育のおかげで、子どもたちは、より高度な教育を、よりひろい、よりたかい知識・能力・技能を身につける機会を獲得するのである。

中学校の英語教育は、高等学校や大学での学習をささえるものでなくてはならない。すなわち、英語の基本的な構造的特徴——音声・文字、語い、文法——の知識、技能と、それをつかって、思想交換の活動——よむ、かく、きく・はなすの形態をとる——の基礎的な能力・技能の習得を保障し、それらを基盤として、高等学校や大学での、より高度な、多様な学習の可能性を準備しなくてはならないのである。

しかし、英語の学習時間がすくなくなるということは、高等学校や

大学での到達レベルをひくくし、日本の文化のレベルを世界のレベルからとおぎけることにつながる。これは、われわれが直面する、想像以上に重大な問題である。中学校の英語教育の内容と方法——学習の時間数もふくめて——を国民的規模で根本的に検討しなおさなくてはならない急務である。

(4) 英語の実践的な能力・技能の基礎が、よりたかい内容の思想交換や、よりすすんだ教育の条件であるといえ、国際的なレベルの文化も、われわれの母語で伝達し継承することができる。それは、直接的には、明治以後のひとびとの努力のおかげなのだが、状況は明治とはことなっている。いまは、母語はおおきく発展して、世界の高度な文化も翻訳でうけとることができる。

このようなとき、すべての子どもが英語の実践的な能力・技能を、あるいは、その基礎を身につけなくてはならないのだろうか。外国の文化と直接かかわるのは、翻訳者、通訳、国際的なレベルで仕事をすすめる専門家たちだけで十分ではないか。そういった疑問を反映してか、中学校において、教科Ⅱ英語は選択科目である。

しかし、中学校で、義務教育の内容として、英語を、必修として、教授し学習するかどうかという問題と、すべての子どもが、将来、思想交換の手段として、英語を必要とするかどうかという問題とはおなじではない。義務教育は、子どもたちに、社会の構成メンバーとして、社会をさらに発展させるために必要な資質を習得させ、さらに、個人としても、将来、多様な発達をとげるために必要な、基礎的な知識・能力・技能の習得を保障するものである。そこでは、子ども自身に、将来、英語の能力・技能を必要とするような仕事につかない



とか、そのようなレベルで仕事をしないといった決断をさせることはできない。英語を学習しないことによってではなく、学習することによって、ひとりひとりの個性や適性が発達し、また、とらえられるのである。義務教育は、なによりも、子どもたちに学習の機会を保障し、なんらかの知識・能力・技能を身につけることによって、つぎの、より広範な発展の可能性を保障するものである。選択科目として、子どもたちから、よりたかい教育や、知識・能力・技能を習得する機会をうばうことはできない。すべてのひとびとが、たとえ、英語の基礎的な能力・技能であれ、それを身につけているということには、想像もつかないほど重要な資質である。なぜなら、国民すべてが、国際的な、レベルのたかい文化をもち、そのレベルで自分の仕事をすすめる可能性、いずれ、ちかい将来に実現しなくてはならない国際連帯を、一部のひとたちだけのものではなく、すべてのひとびとのものにする可能性、人類全体の理想をすべての段階で実現する可能性をはらんでいるからである。

こうして、教科「英語」は、義務教育のなかで、他の教科とともに、義務教育の目的を実現する要素のひとつとして位置づけ、英語で思想交換をすすめるという実践的な目的「意義」だけでなく、一般教育的、訓育的な意義もなうことになる。

英語がもつ一般教育上の、そして、訓育的な側面の意義とはなにか。ここで、この問題を検討しなくてはならない。

(5) 英語の学習は、まず、子どもの思考の発達に影響をあたえる。

子どもたちは、思想交換——はなし——に参加することによって、

母語を経験的に、自然発生的に習得していく。そして、子どもたちの母語の発達には、最初から、つねに、思考の発達とむすびついていて、母語は、思考をささえ、また、思考にささえられている。言語は、民族の歴史的発達の過程で固定化される。一定の諸現象の分析・総合・一般化の体系であり、子どもたちは、母語を身につけながら、自分を取りまく現実のさまざまな現象や、それらの関係を分析・総合・一般化する体系を身につけるのである。だから、子どもたちは、たえず、母語によりかかりながら思考をふかめ、その結果を母語、そして、はなしにまとめ、また、思考をすすめていく。こうして、思考は母語を基盤としてすすめられ、母語をつかたはなしという存在形式なしには存在できないものとなる。だから、子どもたちの意識のなかでは、思考と言語、そして、はなしとが、未分化の、癒着した形をとることになる。したがって、子どもたちは、しばしば、思考と言語とを同一視したり、混同したりする。それは、たとえば、英語をはじめたばかりの時期に、「ネコ」(言語「いきもの」)を、英語では、なせ、*cat*、なのかといったたぐいの疑問をもつことにあらわれる。

思考を母語から自立させる第一歩は、ふつう、小学校にはいって、文字のよみ・かきをならったり、文章語をならいながら、母語を意識化し、対象化するときであろう。そして、語い、文法、音声・文字を学習するとき、さらに、母語の文章の意味をかんがえたり、なんらかのことから表現する母語の形式をさがしたりするとき、思考が母語から自立していくきっかけが得られる。そのとき、思考をすすめる、その結果としての思想をもちこみ、表現する手段として、母語そのものが対象化されるからである。

しかし、思考を母語の束縛からときはなす決定的なきっかけをつく



文では表現できないことを確認しなくてはならないだろう。ここでは、母語の文があらわす現実を、母語の形式によってではなく、主体、属性、動作、客体の観点から分析・総合する過程が必要であらうし、その認識の能力は、英語のうけ身の学習をとおして、さらに発達するであらう。

子どもの思考の発達とかかわる英語教育の意義は、中学校の英語教育のはじめから、その授業実践のなかにたゞしく反映しなくてはならない。その要因は、語い、文法だけでなく、音声・文字、さらに、よむ、かく、はなす・きくの言語活動の内容や、その指導の方法のなかに、機会あるたびに、たゞしく位置づけなくてはならない。わが国の英語教育の歴史のなかで、英語の学習と子どもの思考の関係が、なんどもさげられてきたのだが、その理論においても、実践においても、自然発生にゆだねられ、意図的に位置づけてきたとはいえない。理論と実践の両面で、どのような教材が、子どもの思考の発達とどの面にかかわるのか、それが、英語の学習自身にとって、どのように有効なのかをあきらかにすることが今後の課題である。

(6) 英語を学習する過程で、子どもたちが自分の思考を母語から相対的にきりはずし、対象化して自覚するとすれば、当然、母語も対象化して自覚するだろう。そして、自分の母語の能力をおおきく発達させるだろう。英語という、具体的な対立物のおかげで、現実をとらえ、それを意識づけて表現する母語の手段の特徴を自覚しないわけにはいかないし、それによって、母語を意識的に、たゞしく理解したり、つかったりしようとするようになるからである。

たとえば、英語の授与動詞とその連語を学習するとき、子どもたち

は、ひとに、ものをあたえたり、情報を伝達することをあらわす動詞が、あとに、うけとるひとをあらわす間接対象語と、そのひとにあたえるもの、つたえる情報をあらわす直接対象語とを、その順序にむすびつけることを学習する。

He's going to give me one (= a puppy)! (Steinbeck)

Can't you give him the money and let him go? (Joyce)

Then George told me the whole story. (Christie)

"I'll tell you what to do," she said. (Steinbeck)

"Will you sell me a rat?" (Steinbeck)

"... I'll sell you a cat if you like." (Steinbeck)

ここで、子どもたちは、これらの文の意味をかんがえながら、現実の要素のあいだの同一の関係を表現する手段として、母語には、あげる(やる)／＼／＼／＼、さらに、やりもらいのあわせ動詞、おしえてあげる(やる)／＼／＼／＼、うって あげる(やる)／＼／＼／＼、などのことになった形式を自覚するだろう。そして、母語の場合、その現実の要素のあいだの関係のほかに、はなし手の、きき手や、うけとるひとに対する態度・関係、さらには、ていねいさなどの意味・ニュアンスがもちこまれることを自覚するだろう。それは、自分の言語活動のなかで、母語のやりもらい動詞をたゞしく、意図的に、そして、より表現的につかうこと、あるいは、また、それらがつかわれた発話の意味・ニュアンスをたゞしくとらえる能力や態度を形成するだろう。

このように、英語の学習が子どもたちの母語の能力に影響をあたえる可能性は、英語の学習のすべての領域にわたってある。英語の音声

を学習するときにも、その可能性はある。たとえば、英語のまさつ音「*z*」や、はれつ音「*h*」の調音＝聴覚的特徴を学習するとき、——たとえば、単語 *soo, do* において——子どもたちは、母語のザ行、ダ行の子音のはれつ・まさつ音「*z*」ではなく、まさつ音「*h*」はれつ音「*h*」をつくり、ききわけなくてはならないのだが、その結果、母語のザ行、ダ行の子音の特殊性を自覚するようになるだろうし、それらの子音をつかった音節の正書法も自覚することになるにちがいない。

もちろん、これらの母語の音声・文字、語い、文法の能力・技能の発達には、教科母語（国語）の仕事なのだが、英語の学習の前に、子どもたちがふだんは自覚していない母語を対象化し、母語の音声・文字、語い、文法について体系的な知識をもっていれば、それだけ、英語の学習が確実に、短時間で能率的に展開できる。すなわち、小学校における母語（国語）の教育の質が、英語教育の質と量を決定づけるのである。しかし、他方では、中学校の英語教育が、子どもたちの母語の能力・技能を基盤として、より効果的な学習を保障しなくてはならない。そして、英語の学習が、「すぐれた日本語のいい手」としての子どもたちの母語の能力にはねかえっていく英語教育の内容と方法を組織しなくてはならない。子どもたちの母語の能力の発達とかかわらない、あるいは、それをさまたげるような英語教育は、それ自身、すでに失敗なのである。それは、母語の教育のあり方にもあてはまるだろう。

(7) 義務教育における英語教育は、英語を学習する個人の母語に影響をあたえるだけではなく、民族語としての日本語そのものにも影響をあたえる。その影響がきわだってあらわれるのは語いの領域で

ある。現代日本語の語いのなかには、外来語がたくさんはいりこんでいる。それは、明治以来、西洋との交流がさかんになり、政治、経済、科学、技術、芸術、そして、日常生活の、文化のあらゆる側面に、おおきな影響をうけ、質的にかわっていったことと平行するのだが、主として、西洋からの外来語のおかげで、日本語の語いがゆたかになっている。しかし、幕末から明治にかけての時代では、西洋の文化をとりいれるとき、それぞれの概念をとらえる単語として主役をはたしたのは、外来語ではなく、漢語であった。それは、当時の知識が、教養として、また、文章語として、漢文、あるいは、漢文直訳体の文章をもっていたからである。（例、主観、交換、思考、本能、理想など。）

しかし、第二次世界大戦後、義務教育のなかに英語がとりいれられてからは、漢語による造語よりは、むしろ、外来語が、直接的に、日本語の語いのなかにはいつてくる傾向がよくなった。それは、国民のおおくが、十分な成果としてではないにしろ、いくぶんかでも、英語の初歩的な知識をもっているという、あたらしい状況を背景にしているであろう。

日本語の語いのなかにはいつてくる外来語は、日本語の語いをゆたかにするだけではなく、日本語の語いの体系に影響をあたえ、ときには、意味にさえ変化を生じさせることになる。たとえば、「やどや」は「はたご」、「旅館」の類義語の体系のなかに、外来語「ホテル」がはいりこむことによって、その和語、漢語に、従来からある文体的な、感情的な意味——ニュアンスのちがいのほかに、「西洋風ではない」という意味——ニュアンスをあたえることになってくるだろう。こうして、外来語は、われわれの文化の発展のあり方とかかわっていて、西



ちなみに、和英辞典で、(たべものを)『やく』、あぶる、さらに、たく、にる、ゆでるをしらべてみると、つぎのとおりである。

あぶる……roast; broil (肉や魚などを); grill (焼き器で);  
 やく……roast (肉を); broil (魚を); grill (肉や魚を焼き網で);  
 Bake (パンを造るとき); toast (パン切れや海苔を)  
 たく……boil; cook  
 にる……boil; cook  
 ゆでる……boil

これらの動詞は、その意味の要素——意味的な特徴——として、動作の対象に対する特徴、動作の手段の特徴、動作のしかたの特徴などの点でたがいによりことなり、対立し、語いの体系をつくっているのだが、他の動詞と、どの点で対立するか、その対立のあり方には、その民族の歴史、あるいは、現実へのかかわりかた、現実の意識づけ方が反映されている。

このように、英語の語いを学習する過程でも、英語を母語とする民族の具体的な生活様式、文化、歴史、自然などについてしることができると、これらの知識を得るのは、なによりも、英語民族についてかいてあるよみかた教材(リーダー)からである。

よみかたの学習で得るこれらの具体的な知識は、英語教育のなかで、重要な意味をもつ。

第一に、ひとつの民族が、一定の社会的、歴史的條件、そして、自然の條件のなかでいとなむ具体的な生活をするとは、子どもたちが、自分たちの生活、その条件をみつめるきっかけをつくる。それ

は、教科Ⅱ社会科で学習する知識にたすけられ、また、その学習をたすけるであろう。

そして、また、子どもたちは、英語のよみかたで学習した題材にもとづいて、自分たちの生活をとりえ、それを英語で表現したいという意欲を刺激され、学習のつぎの活動を動機づけられるだろう。

さらに、子どもたちは、自分たちの生活と英語民族の生活とのあいだの特殊性と普遍性をとりえ、他の民族をたたく理解し、そのひとびとと連帯しようという意欲をきずく基盤をもつことになるだろう。たとえば、クジラやイルカをとってたべること、アザラシをころして肉や皮をとること、ウシやブタをころしてたべること、さらに、キツネがかりや闘牛などを残酷な行事とみるかどうかは、民族によってことなるのだが、それも、それぞれの民族が歴史的に、社会的に、自分たちをとりまく自然といかにかわって来たか、その自然を自分たちの生活にどう意識づけて来たかによってきずきあげ、はぐくんできた。たがいにことなる民族の意識、世界観、さらには、宗教にもとづいているからである。しかし、残酷だという感情から、それらの行事に評価をくだすのではなく、未来のために、ゆたかな自然をはぐくむという、普遍的な、人類的な観点から問題を提起し、その問題のよりよい解決につとめる態度が必要となる。そのためには、それぞれの民族を、その自然的、歴史的、社会的条件のもとでたたく理解し、生活をこわすのではなく、たたく発展させるみちすじをかんがえなくてはならない。それぞれことなる民族のひとびとが、人類としてひとつにまとまらなくてはならないという国際連帯の意識をもつことは、それを実現するための前提であり、条件のひとつである。

こうして、子どもたちが、英語民族の生活をしり、ふりかえって、

自分たちの生活をとらえ、さらに、すすんで、国際連帯の意識をもつことは、中学校で英語を学習しはじめたころもついていた、漠然とした、子どもじみたあこがれのような学習意欲を、その根底から、質のちがった、知的なものにかえていく重要な要因となるのである。

義務教育における英語のよみかた教材は、したがって、日本人の生活や文化を題材としたものではなく、英語民族のものでなくてはならない。日本のものはいってゐるのは、英語民族について学習したあと、子どもたちが、自分たちの生活をとらえ、英語民族のひとびとに表現していくための、つなぎの、モデル、あるいは、ひとつの視点をあたえたり、英語による表現のしかたの手がかりをあたえるためのものでなくてはならないだろう。このような位置づけをもたない、日本についてのよみかたの学習は、子どもたちを、せまい経験的な生活の現状のなかにおしとどめ、ひろい視野を拒否する態度、あるいは、外国に対する、おさないあこがれの態度をかためるだけである。

中学校の英語の学習の過程には、言語としての英語——語い、文法、音声・文字——とならんで、英語民族についてかいた、みごた文章のよみものが必要なのである。それは、英語民族についての知識だけでなく、言語としての英語を思想交換の活動のなかにもつてのよみつかうか、そして、英語で、なにを、どのようににはなすべきかを具体的におしえてくれるのである。

(9) 英語の学習は、言語とは、一般に、なにかについて、子どもたちがただしい観念をきずくための、基本的な材料を提供してくれる。言語の一般的な特質を自覚する機会がきわだってくるのは、母語の習得過程と英語の習得過程とが、対照的にことなっているからである。

ある。

子どもたちの母語は、はじめから、ゆたかな思想交換にくわわって、母語を自然発生的につかうことによって、思考と平行しながら習得がはじまる。そして、その言語的な形式を対象化して、その特徴を自覚し、思想交換や思考の活動のなかに、それを意識的につかいこなすこととおわる。一方、英語は、はじめから、言語形式を対象化して自覚し——そこでは、思想交換や思考の内容は母語にゆだねられる——、それを、自覚的におぼえこむことから始まり、意識的に思想交換に運用しながら、英語そのものにも、英語を運用することにも習熟しながら、しだいに母語から自立し、自由な思想交換にたどりつく。

英語を学習する過程で、子どもたちは、言語が、思想交換の手段として、客観的に存在することを理解する。英語の音韻・文字、語い、文法を、いちど、思想交換の活動からきりはなして学習し、それをつかって、はなす・きく・よむ、かくの思想交換の活動を自覚的にこなうからである。しかし、言語は、本来、具体的な思想交換や思考の活動のなかにしかなく、それらの存在形式としてはたらくものだということ、ゆたかな母語の体験をふりかえって、理解するからである。

こうして、子どもたちは、英語を学習する過程で、そして、その結果として、言語と思想交換、さらには、人間の社会的な活動におけるそれらの機能の位置づけ、言語と思考、思考と思想交換の関係、民族の発展と言語の発展、民族のあいだの交流と言語、さらには、言語の内的な構造——文、単語、音韻と、それらの意味・機能——など、言語の一般的な特質をとらえるための具体的な材料をゆたかにもつことになるのである。

これらの、言語の一般的な特質をとらえることは、のちに、ほかの

外国語を学習するときのしかたを決定してくれるだろう。そして、学習の目的に応じて、もっとも効果的な方法を自分でえらぶことができるようになるだろう。

(10) 以上、中学校における英語教育の意義について、もっとも基本的な問題をいくつか検討してきたが、そのそれぞれは、もういちど、理論的にも、実践的にも、とりたてて検討しなくてはならない。それほど、英語教育の方法論と実践にとって重要な問題ばかりである。それぞれの意義は、英語の教科書や授業実践のなかに、英語で思想交換をすすめる能力・技能の形成という目標のもとに統一し、たがい他を前提とするように、有機的に組織化し、意図的に具現しなくてはならない。これは、中学校にかぎらず、学校教育における英語教育の方法論と実践が直面する任務である。(一九八二、三、二)

(注)

1、大学や高等学校で、それぞれの専門とかわって、英語の実践的な能力・技能をみがくということがなければ、子どもたちの英語の学習は、単なる入学試験のためのものになってしまう。これは、中学校の教育を破壊する要因となるだろう。

2、中学校の英語教育の内容は、中学校をおえて、すぐ社会人になる子どももいるということも考慮して決定しなくてはならないだろう。すなわち、子どもたちが、自分の目的にしたがって、自分で、文法書やテープなどをつかいながら、英語の学習をすすめていくのに必要な、基礎的な能力・技能をもちこまなくてはならないだろう。

3、ルビンシニチン、(内藤・木村訳)「心理学」(上)、(青木書店)、一五四—一五五ページを参照。

4、ヴィゴツキー、(柴田訳)「思考と言語」(下)、(明治図書)、二九—三二ページを参照。

5、上村幸雄、「外国語教育と国語教育の関係」(「教育国語」) 41、(一九六七)(むぎ書房)「三三—三三」頁、Л. В. Шерш, О ПОЯВЛЕНИИ СМЕШЕНИЯ ЯЗЫКОВ, 1925 (В сб. ЯЗЫКОВАЯ СИСТЕМА И ПЕРЕВАЯ АКТУАЛЬНОСТЬ, 1974), P. 67—68 を参照。

6、鈴木重幸、「動詞のたちはをめぐって」(「教育国語」) 46、(一九八〇)(むぎ書房)、二二—二四ページを参照。

7、明星学園・英語部、「英語の発音」(むぎ書房)、五七—六一、六七—六九ページを参照。

8、奥田靖雄、「すぐれた日本語のいない手に」(一九五六、(読み方教育の理論)「一九七四」(むぎ書房)を参照。

9、宮島達夫、「近代日本語における漢語の位置」(「教育国語」) 46、(一九六九)(むぎ書房)、二二—二三ページを参照。

10、同上、三〇—三二、三八ページを参照。

11、英語教育が日本語の文法や文法にどんな影響をおよぼしたかについては準備がないので、ここには、ふれることができない。たとえば、進行形に相当する「しつつかある」関係代名詞の「しつつかある」の、比較級の「より」などについても、その発生からのくわしい調査が必要である。

12、Longman's Dictionary of Contemporary English, 1978 を参照。

13、研究社「新和英大辞典」第四版、一九七四から。

14、宮島達夫、「意味の体系性」(「教育国語」) 44、(一九六六)(むぎ書房)、六二—六四ページ、「日本語研究の方法」(一九七八)(むぎ書房)に収録)、および、「動詞の意味・用法の記述的研究」(一九七二、(秀英出版)を参照。

15、ヴィゴツキー、「思考と言語」(下)(明治図書)、二一四ページを参照。



# 言語の体系性 (中)

(8) 要素という概念は、 $\Delta$ あたえられた体系のわくのなかで、相互にはたらかけあいながら、むすびつく構造的な単位である $\Psi$ と、規定することができる。しかし、ふくざつな、ひとまとまり的な体系には、ことなるレベルに属する、さまざまな構造的な単位があつて、それらすべてがあたえられた体系にとって要素ではないとすれば、このような規定ではふじゅうぶんである。たとえば、文という、ひとまとまり的な体系のなかには、相互にはたらかけあう構造的な単位として、単語のほかに、形態素、音節、音韻などがあるが、文にとって要素としてあらわれるのは、単語だけである。化学的な物質である分子のなかには、構造的な単位として、原子のほかに、原子核、素粒子などがあるが、ひとまとまり的な体系としての分子にとっては、原子だけが要素としてあらわれる。

とすれば、文にとってなにゆえに単語だけが要素であるか、分子に



奥田 靖雄

とってなにゆえに原子のみが要素であるか、あきらかにしなければならないだろう。要素としてあらわれる単語は、体系としてあらわれる文との関係において、特殊な性質をもっているはずである。原子は分子との関係のなかで特殊な性質をもっているはずである。一般的にいえば、構造的な単位であっても、要素としてあらわれる客体は、それが所属する体系との関係のなかで、ほかの構造的な単位とはことなる、特殊な特性と機能をもっている。したがって、 $\Delta$ 要素 $\Psi$ とはなにか、あらためてとわかれるとすれば、この特殊な特性と機能とを規定のなかにとりあげることが必要である。

(9) ひとまとまり的な体系において、いくつかの要素は相互にはたらかけあいながら、体系へとむすびつくのであるが、その結果この体系のなかにはあたらしい質がつくりだされる。体系としてあらわれる客体に固有な質規定は、要素の相互のはたらかけあいによってのみ